《論　文》

移動動詞 fall の多義構造について

山　添　秀　剛

要　約

語に対するひとつの考え方として，ひとつの形式に複数の意義が対応するという見方―多義性（polysemy）がある。語にはたいてい複数の意義があり，それらが有機的に結びつくと捉える見方である。多義性に関しては，近年，言語学のあらゆる領域で盛んに議論されているが（cf.Brugman 1981，Lindner 1981，1982，Lakoff 1987，Rudzka-Ostyn 1989，1995，Iwata 1998，Fillmore and Atkins 2000，Tyler and Evans 2001，Taylor 2002，2003 etc.），その成果も方法論も今後さらに批判的に発展しそうな状況にある。本稿では，認知言語学の多義性に関する知見を生かし，移動動詞 fall の共時的意味ネットワーク構造を提案する。方法論的には，瀬戸（1986，1995b，1997a，b，c），Seto（1999，2003）を援用することで，各意義を大きくメタファー・メトニミー・シネクドキの三分法で関係づけ，語の全体像が明確になるような体系的記述を行う。

キーワード：多義性，意味ネットワーク，意味拡張，メタファー，メトニミー，シネクドキ

1　はじめに

近年の言語学で重要なテーマのひとつに，多義性（polysemy）の問題が挙げられる。語にはたいてい複数の意義があり，それらは無秩序に存在するのではなく，ある一定の秩序によって互いに関連づけられることが，これまでの研究からわかってきた。語を意義のネットワークと捉え，語の意味の全貌を探るわけである。

小稿では，動詞義を中心にして fall の多義構造を考察する。ただし，句動詞や慣用表現の考察は別の機会にゆずり，ここでは fall の多義構造の骨格をなす基本的な意義のみを扱う。構成は次の通りである。次節では，先行研究として，代表的な辞書の記述と Iwata（1998）を取り上げ，それぞれの要点と問題点を指摘する。3 節では，具体的考察を行う。まず，本稿が前提とする立場を略述する。次に， fall の空間用法とメタファーによる拡張用法を順に論じる。最後に， fall の多義構造を提案する。

2　先行研究

この節では，fall の多義構造に関する先行研究として，辞書の記述と Iwata (1998) を取り上げ，それぞれの要点と問題点を指摘する。辞書については，語の意味の全体像を意識した記述となっているものとして，英英辞典から NODE [(1)]，英和辞典から『グローバル』を取り上げる。

2．1　辞書の記述

辞書には様々な種類があり，その記述方針も様々な思想に基づく。[(2)] その一端を見ると，まず，①どの言語で記述するか，という面がある。例えば，英語については，一言語辞書である英英辞典と二言語辞書である英和辞典に分類可能である。また，②誰のために編纂されているのか，という面では，ふつう母語話者向けの，いわゆる国語辞典の類いと，外国語学習者が使用する学習辞典に分類可能である。さらに，③見出し語がもつ各意義をどのように配列するのか，という面も重要である。考え方は大きく３つある（cf．瀬戸 2001b）。ひとつは，OED のような「通時的配列」。非常に貴重な資料であるが，共時的な観点から多義性を分析する場合，古い意義や廃用となった意義は必ずしも必要ではない。次に，最近の流行であるコンピュータ・コーパスを駆使した「頻度順配列」。たしかに，求める意義を見つけ出す効率はよくなった。しかし，その語を支える中核的な意義も，各意義の関係もわからないため，語の全体像はつかめない。残された可能性は，共時的な観点から語の多義構造を記述する道である。

本稿で，検討する辞書は，『グローバル』と NODE である。理由はふたつ。ひとつは，この二者を取り上げることで，先に見た①と②の観点から比較検討が可能となるからである。また，他の辞書と比べ，各意義の関係を重視した辞書である点も重要である。両者は，近年の辞書の記述方針からすると，類いまれな少数派に属す。というのも，近年隆盛を極めるコンピュータ・コーパスを駆使した「頻度順記述」にも，史的事実に根拠を寄せる「通時的記述」にも力点をおかず，意味の全体像をいかに明らかにするかという点に力を注ぐ数少ない貴重な辞書だからである。

それでは，この２つの辞書を順に見ていく。

2．1．1　『グローバル』

内外を問わず，最近の学習辞典の特徴は，コーパス・データを利用して意義を頻度順に記述する点である（cf. Cobuild, LDOCE, OALD，『ウィズダム』 etc.）。求める意義にすばやくたどりつける点は素晴らしいが，必然的に意義間の関係を犠牲にするため語の全体像がぼやけてしまう（cf．瀬戸 2001b）。例えば，LDOCE による grow の記述では，その頻度から中心義を「〈数量などが〉増加する」とする。確かに，統計的には「〈数量などが〉増加する」という意義に出会う確率は高いかもしれない。しかしその反面，この語を最も豊かに特徴づける「〈植物が〉成長する」というイメージを後回しにする代償もまた大きい。

このような流れのなかで，『グローバル』は，多義構造を明快に捉えるために独自の手法をとる。(1)は，『グローバル』による動詞 fall の記述である。以下で，『グローバル』の手法を概観し，その問題点を指摘する。(3)

(1)

【落下する】

1　**落ちる**；〔雨などが〕降る；〔葉などが〕散る．～from[off] the horse ...

2　【落ちるようにやって来る】〔夜，季節が〕来る；〔静寂が〕訪れる，〔恐怖，眠りなどが〕襲って来る；〈on, upon, over ...に〉．Dusk began to～．...

3　【こぼれ落ちる】VA（**～from...**）〔言葉，ため息などが〕...から（思わず）出る，漏れる，〔言葉などが〕（思わず）出る．Words of regret *fell from* his lips.

【落ちかかる＞当たる】

4　VA〔矢，弾が〕当たる；〔光，影が〕落ちる；〔視線が〕向く，注がれる；〔声，音が〕聞こえる；〔アクセントが〕ある；〈on...に〉．The shell *fell* wide of its mark．...

5　VA〔特定の日が〕やってくる；〔行事が〕ある；〔記念日などが〕当たる〈on...に〉．Easter *fell* early that year．...

6　VA（**～on, to...**）〔くじなどが〕...に当たる；〔遺産などが〕...に渡る；〔責任などが〕...にかかってくる；〔容疑などが〕...にふりかかる．The lot *fell* on her．...

【落ち込む】

7　（類語 否定的な状態になる場合に使うことが多い；→ become）

(a)　VA（ある状態に）**陥る**，なる．～in love（with...）...

(b)　VC（～X）Xの状態になる．～ill[sick]...

8　【入る】VA 分けられる；（分類されてある部類に）入る，属する；〈into, under ...に〉．That topic ～*s within* [*outside*] the scope of the present study.

【低下する，下向きになる】

9　〔温度，物価，水位などが〕**下がる**，低くなる；〔勢いなどが〕衰える，弱まる；〔潮が〕引く；（↔ rise）．The temperature *fell* ten degrees [to 10° F]．...

10　VA〔髪，衣服などが〕垂れる，垂れ下がる．the white beard ～*ing* to his chest ...

11〔目が〕下を向く，伏し目になる；〔顔が〕悲しい[失望した，恥ずかしい]表情になる．Her eyes *fell* before my gaze.

12　VA〔土地が〕傾斜している，下り坂になっている，〈away, off〉〈to, toward...の方に〉；〔川が〕注ぐ，流れ込む，〈into...に〉．The land ～*s away to* the lake　[*to* the south]．

【下向きになる＞倒れる】

13　**倒れる**，転ぶ；〔建物などが〕倒壊する，崩れ落ちる．stumble and～ ...

14　[雅] 傷ついて倒れる，死ぬ．～in battle ...

15　〔政府などが〕倒れる；失脚する．The party [dictator] *fell* from power.

【陥落する】

16　〔要塞などが〕**陥落する**，落ちる，〔軍隊などが〕降伏する．The castle *fell* without a struggle．...

17　[旧]（誘惑に負けて）堕落する，罪を犯す；[古]〔女性が〕貞操を失う．Eve *fell* when she was tempted.

18　[俗] ぱくられる；刑務所行きになる．

『グローバル』は，「多義の語を中心に『本義』と『分義』をそれぞれ【　】，【　】に入れて示す」（p. xiii）とし，【　】で示す「本義」は，「いくつかの語義の根底にある基本的意義」（ibid.）と定義する。本義は，語義を成員とするカテゴリーの共通部分であり，認知文法的に

いえば，ほぼスキーマに相当すると考えられる。また，【　】で示す「分義」について，「訳語にすぐ結びつかないときは，前に【　】を置いて補足する」（ibid.）と説明する。すなわち，分義は，本義から語義へ理解がスムーズにいかない場合の仲立ちである。このように，『グローバル』は，本義＞分義＞語義（訳語）という三層構造から語の多義構造を説明しようとする。

動詞 fall の場合，多義構造の枠組みとしての本義は６つある（「落下する」「落ちかかる＞当たる」「落ち込む」「低下する，下向きになる」「下向きになる＞倒れる」「陥落する」）。本義の設定には，類語・縁語などを駆使し，日本語の多義性を最大限に活用して，最小限の情報量で意義のまとまりを示そうとする職人技が必要になる（cf．山口 2001）。fall の場合も，「落」「下」「倒」を含む類［縁］語により全体的な意義の構造性を明示しようとする意図がわかる。この下にそれぞれ２つから４つの意義が分類されている。語義をひとつの意義とすれば，『グローバル』は fall を18の意義から捉える。分義は，本義「落下する」の下に「落ちるようにやって来る」と「こぼれ落ちる」，本義「落ち込む」の下に「入る」として現れ，本義と語義の橋渡しをする。

次に，問題点を３点指摘する。ひとつは，本義あるいは語義間の関係について。なるほど，本義＞分義＞語義という三層構造から語の多義構造を説明するのは従来の英和辞典を一歩も二歩も前進させたといえる。しかし，本義同士の関係や語義同士の関係が依然わからないという問題も残す。類［縁］語を駆使し全体的な意義の構造性を明示しようとするすぐれた試みなだけに，もう一手足りない感は拭えない。

二つ目は，ひとつの語義の下にくる例文が文字通りのものと比喩的なものを混在させる場合がある点。例えば，移動過程を表す本義「落下する」の下では，文字通りの空間移動（「１落ちる」）と比喩的落下（「２落ちるようにやって来る」「３こぼれ落ちる」）を語義レベルで区別する。となれば，２つ目の本義，落下の着点を表す「落ちかかる＞当たる」(4)の下でも，文字通りの意義と比喩的に展開した意義からなる構成だと予想する。しかし，このカテゴリーに属す最初の語義自体の中に，文字通りの空間移動（〔矢，弾が〕当たる）と比喩的なもの（〔光，影が〕落ちる；〔視線が〕向く，など）を混在させている。このような混乱は，「語義」（意義）の定義をあいまいにし，理論的整合性を欠く記述になりかねない。

三つ目は，「語義」（意義）の配置の問題。例えば，分類を表す分義「８入る」は，状態変化を表す語義（語義番号７）とともに，本義「落ち込む」の中に配置するのが適切なのだろうか。また，いわゆる主観的移動（subjective motion）の例（「10〔髪，衣服が〕垂れる」「12〔土地が〕傾斜している」）は，数量の低下（語義番号９）や伏し目（語義番号11）を表す語義とともに，本義「低下する，下向きになる」に配置していいのだろうか。語義の７と８の共通部分を抽出すれば，そのスキーマは本義「落ち込む」になるのであろうか。語義の９から12の共通部分を抽出すれば，そのスキーマは本義「低下する，下向きになる」になるのであろうか。

本節では，『グローバル』の記述方針の要点と問題点を見た。次に英英辞典 NODE の多義性

に対する試みを概観する。

2．1．2　NODE

前節の『グローバル』と同様に，NODE も多義構造が理解できるような工夫が意識的になされている。(2)は，NODE による fall の記述である。以下で，NODE の多義語記述の工夫と問題点を概観する。(5)

(2)

1　move from a higher to a lower level, typically rapidly and without control: *bombs could be seen* ***falling from*** *the planes* | ...
- ■ (**fall off**) become detached and drop to the ground : *my sunglasses fell off and broke on the pavement.*
- ■ hang down : *hair that was allowed to fall to the shoulders.*
- ■ (of land) slope downward : *the land* ***fell away*** *in a steep bank.*
- ■ [no obj.] (of someone's eyes or glance) be directed downwards.
- ■ [no obj.] (of someone's face) show dismay or disappointment by appearing to droop : *her face fell as she thought about her life with George.*

2　(of a person) lose one's balance and collapse : *she* ***fell down*** *at school today.*
- ■ throw oneself to the ground : *they fell on their knees, rendering thanks to God.*
- ■ (of a tree or structure) collapse to the ground : *after the earthquake, part of the city* ***fell down***.
- ■ (**fall over**) informal (of computer hardware or software) stop working suddenly ; crash.

3　decrease in number, amount, intensity, or quality : *imports* ***fell by*** *12 percent* | ...
- ■ (of a measuring instrument) show a lower reading : *the barometer had fallen a further ten points.*
- ■ (**fall away**) (in sport) play less well.

4　be captured or defeated : *their mountain strongholds* ***fell to*** *enemy attack.*
- ■ Cricket (of a wicket) be taken by the bowling side.
- ■ die in battle : *an English leader who had fallen at the hands of the Danes.*
- ■ [no obj.] archaic yield to temptation : *it is their husbands' fault if wives do fall.*

5　pass into a specified state : *many of the buildings* ***fell into*** *disrepair* | [with complement] *she fell pregnant.*
- ■ occur or arrive : *when night fell we crawled back to our lines* | ...
- ■ (**fall to doing something**) begin to do something : *he fell to musing about how it had happened.*
- ■ be drawn accidentally into : *you must not* ***fall into*** *this common error.*

6　be classified in the way specified : *canals* ***fall within*** *the Minister's brief.*

まず，NODEの編集方針を確認する。大きな特徴は２つ。ひとつは，コアセンス（core sense）とサブセンス（subsense）の分割。コアセンスとは，「現代標準英語における当該語の典型的，中心的用法」（p. ix）［typical, central uses of the word in question in modern standard English］で，「通常の現代的語法において最も文字通りで中心的なものとして母語話者に受け入れられている意味」（ibid.）［the one accepted by native speakers as the most literal and central in ordinary modern usage］である。(2)では，語義番号１から６がそれぞれコアセンスに相当する。サブセンスは，コアセンスの下に位置づけられる意義で，■で表示される。fallの場合，サブ

センスは16ある。NODEは，サブセンスとコアセンスの二層構造から語の多義性を説明しようとする。本義＞分義＞語義という三層構造で語の多義構造を説明する『グローバル』と比べ，NODEは，一層すくない。

この辞典のもうひとつの特徴は，意義間の関係にも気を配った点である。すなわち，コアセンスからサブセンスへの意義拡張に３つのパタンを導入する。(a)比喩的拡張（figurative extension of the core sense），(b)特殊化事例（specialized case of the core sense），(c)その他の意味拡張・変化（other extension or shift in meaning, retaining one or more elements of the core sense）である。この点は，本義＞分義＞語義という構造性のみで語の多義構造を説明しようとした『グローバル』よりも，さらに一歩進んでいるといえる。

(a)比喩的拡張により展開する意義は，サブセンスを示す■の後に，figurative と表示される。例えば， logjam （コアセンスは「川につかえた丸太のかたまり」）のサブセンス「(状況の）行き詰まり」や bankrupt （コアセンスは「(財産が）破産した」）のサブセンス「(主張・能力などが）破綻した」が例として挙げられている（ibid.）。 fall の記述(2)では，この拡張パタンは見当たらない。(b)特殊化事例には，サブセンスを示す■の後に，専門領域の名称が表示される。例えば， Baseball や Geology など（ibid.）。(2)では，コアセンス４から展開する最初のサブセンスに Cricket として表示されている。(c)その他の意味拡張・変化による展開は，前二者を除くすべてで，(2)を見てわかるように，大半がこのパタンによる。

次に，問題点を２点指摘する。ひとつは，コアセンスあるいはサブセンス間の関係について。なるほど，意義関係を明らかにするために，(a)比喩的拡張，(b)特殊化事例，(c)その他の意味拡張・変化という３つのパタンを導入した点は評価に値する。辞書界における画期的前進といえる。しかし， NODE が配慮した意義拡張は，あくまでコアセンスからサブセンスへの展開だけである。これでは，コアセンス同士あるいはサブセンス同士の意義関係がわからず，語全体の多義構造は明らかにならない。

二つ目は， NODE が導入した３つの意義展開パタンについて。あくまでコアセンスからサブセンスへの展開のみという不十分さはあるものの，意義間の関係に配慮した点は素晴らしい。しかし，山口（2001：72）も指摘するように，この３パタンの定義には問題がある。

まず，(a)比喩的拡張から見よう。例えば，先に見た logjam や bankrupt に加え， trap （コアセンスは「(動物を捕らえるための）わな」）のサブセンス「(人に対する）計略」や「窮地」，blanket （コアセンスは「毛布」）のサブセンス「(毛布のように）一面を覆う物」（a dense grey *blanket* of cloud）などは，この比喩的拡張にあたる。問題は，比喩的拡張（figurative extension）とは何なのか，明確な定義がなされていない点である。これにより，記述全体の一貫性が確立されていない印象を与える。例えば，dead end のコアセンス（「(道の）行き止まり」）の下にあるサブセンス「(仕事などの）行き詰まり」や，形容詞 broken のコアセンス（「(物が）壊れた」）の下にあるサブセンス「(関係が）崩壊した」や「(約束が）破られた」， fruit のコ

アセンス（「(植物の）果実」）の下にあるサブセンス「(苦労の）成果」や，jacket のコアセンス（「上着」）の下にあるサブセンス「(本の）カバー」や「(ジャガイモなどの）皮」は，一見すると，logjam, bankrupt, trap, blanket と同様に(a)比喩的拡張のパタンに当てはまりそうだが，そうではなく(c)その他の意味拡張・変化に分類されてしまう。

また，一点目とも関係するが，NODE は３つの意義拡張パタンを当てはめるのはコアセンスからサブセンスへの拡張だけであるため，コアセンスからコアセンスへの拡張にはどんな原理が働くのかがわからない。しかし実際，コアセンスからコアセンスへの拡張に(a)比喩的拡張のパタンに当てはまる場合が多々ある。例えば，arm の「１（人間の）腕」から「２形態・機能面で腕に似た物」(いすのひじ掛け，木の大枝など)，foundation の「１（建物の）基礎」から「２（事の）基礎，根拠」，key の「１（ドアなどの）鍵」から「２（コンピュータなどのキーボードの）キー」や「３（問題解決のための）鍵，手がかり」への展開などである。

(b)特殊化事例のパタンについては，これと方向性が逆の「一般化事例」を考慮していない点に理論的不均衡を感じる。「一般化事例」には，ship が「船で輸送する」からトラックや列車なども含め広く「輸送する」を表すようになったり，登録商標名だった固有名詞が普通名詞化する場合（sellotape, walkman, xerox）などがある。

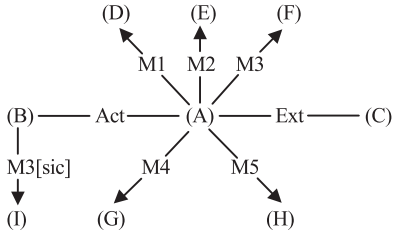
(c)その他の意味拡張・変化のパタンについては，やはりその定義があいまいなのが問題である。fall の場合がいい例であるが，NODE では意義拡張がほとんどこのパタンになってしまう。これでは，何もやらないのと等しいくらい無意味である。

２．２　Iwata（1998）

辞書以外の研究で，fall の多義構造を考察したものは，筆者の知るところ Iwata (1998：231-233) しかない。この節では，Iwata (1998) の分析を概観し，その問題点を指摘する。

Iwata (1998) は，第10章(pp. 210-236)で上下の方向性と関わる動詞を５語（rise, raise, lift, drop, fall）取り上げ，それぞれの意味ネットワークを提示する。まず，Iwata (1998：233) が結論として提示する fall の意味ネットワークとその分析手法を例文とともに確認し，その後問題点を指摘する。

(3)



M1：MORE IS UP ; LESS IS DOWN ＋ NUMERICAL SCALE
M2：MORE IS UP ; LESS IS DOWN
M3：HAPPY IS UP ; SAD IS DOWN
M4：PEOPLE ARE CONTAINERS ＋ IDEAS ARE OBJECTS
M5：PROPERTIES ARE LOCATIONS
M6：ABSTRACT IS CONCRETE

(3)は，Iwata (1998) が提案する fall の意味ネットワークである。(A)から(I)まで９つの意義を認定し（対応する例文は(4)），各意義の関係は Act，Ext，M（１－６）で結ばれる。Act は active zone，Ext は GO/GO_{Ext} alternation，Mは metaphor を表す。まず，Iwata (1998) は，意義のまとまりを大きく２つに分類する。水平方向に広がる意義（(A)-(C)）を G (rammatical) -Network，垂直方向に広がる意義（(D)-(I)）を S (emantic) -Network と呼ぶ。G-Network は，生成文法と密接に関係する語彙意味論（Lexical Semantics）で盛んに研究される項構造交替（argument structure alternation）の現象を扱う。他方，S-Network は，認知言語学で盛んに研究されるメタファー写像や Jackendoff (1983) の主題関係仮説（Thematic Relations Hypothesis）で扱われる現象を扱う（cf. Iwata 1998：20-21，237-238）。端的に言えば，岩田（1998：43）が明言するように，G-Network は「空間的意味領域」，S-Network は「抽象的意味領域」をなす。

以上を踏まえ，例文とともに，この多義分析を概観する。

(4) a. The china *fell* from her hand. (A)
b. She lost her balance and would have *fallen* if she hadn't supported herself. (B)
c. His wavy, reddish hair *falls* to his shoulders. (C)
d. The value of the dollar has *fallen*. (D)
e. Her voice *fell* as they entered the room. (E)
f. Her spirits *fell* at the bad news. (F)
g. What words had *fallen* from the lips of Mr Smythe? (G)
h. He *fell* silent. (H)
i. The regime had *fallen*. (I)

空間的意味領域をなす G-Network は，意義(A)，(B)，(C)の３つからなる。中心義は，「落ちる」を表す(A)（例文は(4a)）である。意義(B)（例文は(4b)）は「倒れる」を表し，active zone により中心義と結びつく。意義(C)（例文は(4c)）は「主観的移動」を表し，GO/GO_{Ext} alternation により中心義と結びつく。

抽象的意味領域をなす S-Network は，意義(D)から(I)の６つからなる。すべてメタファーにより拡張するが，関わるメタファーの種類はそれぞれ異なる。この違いは，Lakoff 流の概念メタファー（A IS B）の違いとして表される（(3)のネットワーク図の右を参照）。(I)を除く(D)から(H)の５つの意義は，中心義(A)「落ちる」から拡張し，(I)だけは，意義(B)「倒れる」から拡張する。

次に，問題点を大きく３つだけ指摘しておく。ひとつは，意義(G)の例文(4g)について。(4g)は，words fall from one's lips（言葉が人の口をついて出る）の一例である。これをひとつの意義として認定していいのだろうか。意義(G)は，M4（PEOPLE ARE CONTAINERS ＋ IDEAS ARE OBJECTS）が拡張原理だが，(4g)を典型例として他の実例に大きく広がる意味カテゴリー

なのであろうか。なるほど，先に見た『グローバル』は，ひとつの意義として認定しているが，実際このように扱う辞書は筆者の知るところ少数派である。最近の英英辞典（先に見た NODE や Macmillan，OALD など）は，慣用句としても載せていない。記載する英英辞典も，例えば，LDOCE は慣用句（fall from sb's lips）として挙げ，literary と表示し，CIDE は formal or literary と表示する。このように，辞書によって判断のばらつきがあり，しかも文語である慣用句をひとつの意義として認定するのは抵抗を感じる。

二つ目は，意義の認定について。例えば，「抽象的落下」を表す例 — Dusk began to *fall*./ A dead silence *fell* upon the class./ Easter *fell* early that year.（『グローバル』）や，「分類」を表す例 — That topic *falls* within [outside] the scope of the present study.（『グローバル』）/ canals *fall* within the Minister's brief.（NODE）は，Iwata（1998）の fall の意味ネットワークではどこに位置づけられるのだろうか。

三つ目は，意義(B)から意義(I)への拡張を動機づけるメタファーを M6（ABSTRACT IS CONCRETE）とする点。この「抽象は具象である」という概念メタファーは，いわゆる「存在のメタファー」（ontological metaphor）(6) に等しく，したがって，意義(B)から意義(I)への拡張のみを特徴づけるとするのは理論的に無理があるように思える。抽象領域にメタファー拡張する意義は，その主体は実体がないだけに，全て等しく「存在のメタファー」の影響がある。意義(I)以外の（4d-g）においても，価値・音量・元気・言葉という抽象概念が「落ちる」ためには，当然「存在のメタファー」によりモノ化しなければならない。

3　考　察

前節では，先行研究として，『グローバル』と NODE の記述と Iwata（1998）について，その要点ならびに問題点を概観した。それを踏まえ，本節では移動動詞 fall の多義構造を提案する。まず，具体的考察に入る前に，本稿がとる理論的枠組を概観する。その後，fall の空間用法，メタファーによる拡張用法と順に考察する。

3．1　分析手法

移動動詞 fall の各意義を考察し，多義構造を提案するにあたり，本稿が依拠する理論的立場（瀬戸 1986，1995a，b，1997a，b，c，2001a，b，c，Seto 1999，2003，山口 2001）について 3 点確認する。

ひとつは，語に対するアプローチについて。ひとつの形式に複数の意義が対応する多義性の立場をとる。各意義は，特定の意義を中心義として共時的意味ネットワーク構造をなす。この構造は，放射状もしくは家族的類似カテゴリーとなる（cf. Lakoff 1987，Taylor 2003）。CIDE のように，同綴・同音異義語として異なる意義を別見出しにする，多義を認めないアプローチとは，対照をなす。

二つ目は，中心義について。中心義は，他の意義を理解するうえでの前提となり，具体性が高く，用法上の制約を受けにくい。それゆえ，意義展開の起点（接点）になることがもっとも多い。中心義の設定には，「頻度順」，「通時的に重要な順」，「共時的に重要な順」など，いくつかの考えがある。本稿では，「共時的に重要な順」に意義を配列する。

三つ目は，各意義の拡張関係について。本稿では，意義の拡張関係を，メタファー・メトニミー・シネクドキの３つのリンクによって説明する。現時点では，意味拡張プロセスの内容は質量ともに研究者によって差がある。依然大勢といえるのは，レトリック研究の伝統的な見解をよしとし，シネクドキはメトニミーの一種と捉え，メタファーとメトニミーを二本柱する立場である。この傾向はとくに海外で根強い（cf. Lakoff and Johnson 1980，Lakoff 1987，Kövecses 2002，Taylor 2003など多数）。しかしながら，国内では，厳密な理論的整合性からシネクドキとメトニミーを峻別し，メタファーとともにこの３つを意味拡張プロセスとする立場が徐々に優勢になりつつある（cf. 佐藤 1978，瀬戸 1986，1995b，1997a，b，c，Seto 1999，2003，籾山 1997，1998，山口 2001，籾山・深田 2003 etc.）。

最後に，意味拡張プロセスとしてのメタファー・メトニミー・シネクドキの定義とそれぞれの例を確認する。(7)

(5)　a．メタファーは，形態･機能･特性などの類似関係に基づいて，ある抽象的でわかりにくい対象を別の具体的でわかりやすい対象に見立てる現象である。

b．メトニミーは，（現実）世界における空間的・時間的隣接関係に基づいてある『もの』から別な『もの』へと指示が転換する現象である。（瀬戸 2001a：646）

c．シネクドキは，より包括的なカテゴリーとより限定的なカテゴリーとの間の意味的包摂関係に基づいて一方から他方へカテゴリーが伸縮する現象である。（瀬戸 2001a：646）

例えば，eye が「（人間・動物の）目」から「目に似たもの」（an *eye* of a needle [typhoon]，*eyes* on a potato など）に展開すれば，それは（5a）のメタファーによる。とくにこの場合は，形態の類似性に基づく。attack が「（人・場所を）攻撃する」から「（人・考えなどを）言葉で攻撃する→非難する」（*attack* the government [his plan]）に展開すれば，そこには機能の類似性が感じられる。(5b) のメトニミーにより展開する例は，neck や thirsty など。neck が「首」から「襟」（the *neck* of a sweater）に指示がずれれば，空間的な隣接関係が関わり，thirsty が「のどが渇いた」から「のどを渇かせるような」（*thirsty* work [day]）に指示がずれれば，因果関係による時間的な隣接関係が関わる。(5c) のシネクドキにより展開する例は，drink や ship などがあげられる。drink は液体一般を「飲む」からとくに「酒を飲む」に意味カテゴリーを縮め，ship は「船で輸送する」からトラックや列車なども含め広く一般的に「輸送する」に意味カテゴリーを広げる。

3．2　空間用法

語がある意味から別の意味へと拡張するとき，そこには経験的な裏づけ―動機づけ（motivation）―がある。この経験基盤の本源は，我々の身体であり，我々は自らの身体を通してしか世界を捉えられない。このような身体的制約は，具象から抽象へと向かう我々の認識パタンにも現れる。

この節では，移動動詞 fall の意味ネットワークの根底を支える意義を考察する。移動動詞 fall の空間的な意義は〈落下〉〈転倒〉〈主観的移動〉の 3 つがある。これらの空間用法では，移動主体の全体・部分のいずれが落下するのか，主語として現れる要素がどのような性質のものか，により意義が区別できる。

中心義は，〈落下〉を表す fall ①「落ちる」である。例えば，(6)がその例。[8] この類いは「物体が引力により垂直に落下する」プロセスを表す。これを図示すると図 1 となる。

(6)　a．The snow began to *fall* again.
　　b．We just *fell* through the air for a while and then the parachute opened.
　　c．He had *fallen* from an upstairs window and he fractured his skull.
　　d．An enormous bomb *fell* to [on] the place.
　　e．Hundreds of paratroopers have *fallen* wide of their target zone.
　　f．Rocks had *fallen* onto the road, cutting off the way forward.
　　g．Michael didn't see where he was walking and *fell* into the pool.

図 1　fall ①

中心義 fall ①について，重要なことは次の 4 点に整理できる。ひとつは，ベースとして機能する「起点－経路－着点スキーマ」の構成要素（「起点」「経路」「着点」）が典型的に「垂直軸」に存在する点。[9] 同じく移動動詞である arrive, come, leave, go などは典型的には「水平軸」が重要になる。

二つ目は， fall の語彙的意味特性からこのスキーマの「経路」がプロファイルされ，そこを移動するという「プロセス」（図 1 の太い矢印）に意味の重点がある点。その典型例が（6a）。前置詞句等を加えれば，「経路」を指定できる（6b）。また，落下の開始点としての「起点」(6c) や、落下の最終点としての「着点」(6d, f, g) も明示可能である。もちろん，文脈により，「起点」「経路」「着点」の各要素が複合的に言語化される場合もある。

一般的に，「起点－経路－着点スキーマ」を構成する「起点」「経路」「着点」について，我々はこの三者に同等の価値を与えるのではなく，着点＞起点＞経路の順に「着点」にもっとも大きな関心を与える傾向がある（cf. Dirven and Verspoor 1998：88-89）。この傾向は，次節で見る抽象領域の構造化に影響を与える。すなわち，抽象領域の意義は，(6c) のような「起点＋プロセス」よりも (6d, f, g) のような「プロセス＋着点」の認識によって支えられる意義が多い。

三つ目に，その主語に「移動主体」（図１の丸印）が実現する点。この点は， fall ③〈主観的移動〉との対比が重要である。

最後に，このような垂直落下現象は，移動主体の意思とは無関係な単なる自由落下を表す点。したがって，次の fall ②〈転倒〉とは異なり，基本的に正か負かの価値に拘束されることはない。ある対象が「落ちる」ことは，状況・文脈により，いい場合にも悪い場合にもそのどちらとも言えない場合にもなる。(6a) などはまさにそうであろう。以上の４点は，中心義 fall ①「落ちる」に付随する典型的かつ重要な要素といえる。

次に，〈転倒〉を表す fall ②の例文を見る。(7a) は「倒れる」，(7b) は「倒壊する」[10] を意味する fall の例である。これは図２のように表せる。

(7)　a．He lost his balance and *fell* over backwards.

　　b．Both buildings *fell* to the ground－killing an estimated 5,000 people and destroying additional buildings nearby.

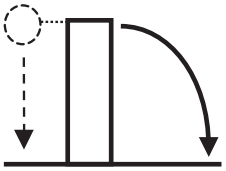


図２　fall②

これらの例にも「起点」「経路」「着点」が存在する点は，中心義 fall ①「落ちる」と同じだが，物体が平面に立ち，その一部が接触している点（図２の白抜き長方形）は中心義「落ちる」と異なる。

(8)のように，一見「垂直落下」という要素が捨象されているような例にも，認知的に最も際立つ最上部（図２の点線丸印）に注目するなら，そこが中心義「落ちる」と同様に，垂直落下していることがわかる。Iwata (1998：231-233) でも，この認知的に最も際立つ部分を active zone とし，このような例を fall ①とは別の意義として分析する。

この分析自体には賛成である。しかし， active zone も広くメトニミーの一種だと考えられるので，本稿では fall ①「落ちる」から fall ②「倒れる，倒壊する」への意義拡張プロセスをメトニミーとする。理由は，同じ現象を利点もなくことさら別の用語で表現することは，無意味であり，混乱をきたすおそれすらあるからである。[11] さらに，このメトニミーは，「全体で部分」を表す空間的なメトニミーといえる（瀬戸 1997c, 2001c， Seto 1999)。というのも，fall ①とは違い， fall ②の場合は，移動対象の，認知的に最も際立つ一部のみが〈垂直落下〉しているからである。

また，〈転倒〉を表す fall は，意図的に倒れるといった特殊な状況を除けば，その性質上典型的に「突然」「誤って」「故意でなく」といった意味要素が伴う。fall ①「落ちる」が価値に拘束されずに垂直落下現象を表すのに対し，このような「突然」「誤って」「故意でなく」といった意味要素が伴う fall ②「倒れる，倒壊する」には，「負の価値」が伴うといえる。

これは，人間が上下の軸に与える身体感覚に基づく。すなわち，「直立と横臥は，活動と休息，生と死を象徴し，身体の構えとしてもっとも基本的な対立項となる」（瀬戸 1995a ：213）。価値に拘束されない fall ①「落ちる」が同じく価値に拘束されない rise と対立するのに対し，「負の価値」が伴う fall ②「倒れる，倒壊する」は，「正の価値」が伴う stand と対立関係にある。この点も重要である。

最後に，(8)の例文を見る。

(8) a． Flowing down the hill, the road *falls* down to the Pacific coastline.
b． The Volga river *falls* into the Caspian Sea.
c． Her golden wavy hair *fell* around her shoulders.
d． He is tiny－the coat *falls* to his ankles.

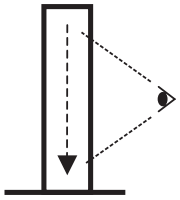


図 3　fall③

これらの例は，主観的移動（subjective motion）とか虚構移動（fictive motion）といわれる例である。主語には物理的に移動する要素は現れず，道路など「長く伸びるもの」（図 3 の白抜き長方形）が現れ，そこを「経路」として，話者の「視線」（図 3 の目）が上から下に移動する。この時，この主観的な心的移動物としての「視線」は存在のメタファー（ontological metaphor）によって実在物と同等のものに見立てられる。したがって，このような，fall ③〈主観的移動〉の例は，メタファーにより心的移動物を「もの」と見立て，さらに，心的移動物と経路の間にある空間隣接に基づいて，中心義 fall ①からメトニミーによる意義拡張をすることになる。fall ②「倒れる，倒壊する」には，「全体で部分」を表す空間的なメトニミーが関与していたのに対し，これら主観的移動の例は「経路」と，メタファーを介した「心的移動物」との間の「空間隣接」に基づくメトニミーが関与し，それぞれの意義が中心義から異なる種類のメトニミーによって意義拡張する。

以上， fall の空間的な意義を 3 つ確認した。次に，メタファーによる拡張用法を考察する。

3．3　メタファーによる拡張用法

前節では， fall の空間用法を考察した。垂直軸上の下方運動についての物理的・身体的経験が，メタファーによる拡張用法に認識の基礎を与える。結論から言えば， fall の拡張用法として，〈抽象的落下〉〈数量の落下〉〈分類〉〈中立状態への変化〉〈抽象的転倒〉〈異常状態への変化〉の 6 つの意義が認定できる。そして，〈抽象的落下〉〈数量の落下〉〈分類〉〈中立状態への変化〉の 4 つは fall ①から「落ちる」という特性を受けて，〈抽象的転倒〉〈異常状態への変化〉の 2 つは fall ②から「倒れる，倒壊する」という特性を受けて，メタファーにより意義展開する。以下で，この 6 つの意義を順に見ていく。

まず，fall ①「落ちる」から拡張する 4 つの意義から順に検討しよう。〈抽象的落下〉の例は，次のようなものである。

(9)　a．The snow thickened as night [dusk] *fell*.
　　b．Darkness had *fallen* when we reached the beaches.
　　c．They listened to the words of wisdom that *fell* from his lips.
　　d．Japan's best chance *fell* to Shinji Ono on the half-hour.
　　e．A shadow *fell* across my sunny table.
　　f．A long silence [hush] *fell* between us.

(9)は，夜・夕闇・影・沈黙・機会・言葉などの実体のないものが，まるで物体が落下する（前節の(6)参照）かのように，「落ちる」ことを表す。(9a, b）の夜や夕闇は，まだ fall の語彙的意味特性である「垂直軸」が感じられる。夜・夕闇が降りてくるという認識である。このような自然現象についての認識は，日本語とも共通しそうである（「夜の帳が降りる」）。沈黙・機会・言葉など，完全な抽象概念が「落ちる」のには，「落ちる」以前にモノ化していなければならない。「存在のメタファー」（ontological metaphor）の力も必要になる。

fall は，具象物が垂直落下するように，実体のないものの落下プロセスも表す（9a, b）。文脈上，落下プロセスだけでなく，その落下を始める「起点」を明示したい場合（9c），前置詞 from が伴うのも空間用法と対応する（前節の（6c）参照）。また，文脈上，落下プロセスだけでなく，その落下が終わる「着点」を明示したい場合（9d），前置詞 to, on などが伴う（前節の（6d, f, g）参照）。

とくに「接触」を表す前置詞 on で「着点」を明示すると，「当たる，命中する」というニュアンスが出る。(10a-f) を動機づける空間用法は，（6d）や The first punch *fell* on his nose.（LDOCE）などである。(10g）の fall wide of the mark は「的からはずれる」（正確ではない）を表す。これを動機づける空間用法は，（6e)。

(10)　a．The clouds parted and through them a beam of light *fell* on Sandweg church.
　　b．Then a great fear *fell* on me.
　　c．Tragedy *fell* upon the city in 1863 when fire swept throughout the city.
　　d．She told us that good fortune *fell* on her family when his husband won the lotto jackpot.
　　e．Her birthday *fell* on a Sunday and Sandra was having a big barbecue lunch party.
　　f．The accent of icelandic words *falls* in almost all cases on the first syllable.
　　g．Policymakers' expectations often *fall* wide of the mark.

このような〈抽象的落下〉の例を fall Ⓐと呼ぶ。

次に，〈数量の落下〉を表す fall の例を見よう。

⑾ a． Oil prices *fell* sharply.

b． Between 1984 and 1988 Ford 's share of the European new car market *fell* from 13 percent to 11.5 percent.

c． Education standards have *fallen* and illiteracy is rising.

d． If the temperature *falls* below 0℃，the water in my car radiator will freeze.

e． As no-one spoke, his voice *fell* to a harsh whisper.

f． When I first heard that news, my spirits *fell*.

価格・市場占有率・教育水準・気温・音量など，何かしらの数量スケールが「落ちる」ことを表す。やはりまるで物体が落下するかのように，数量がその目盛りを下方向に移動する。(11f) は，「元気がなくなった」ことを示す。我々は，元気（spirits）に関するバロメータにおいても，その目盛りが落ち込んだり（fall），沈み込んだり（sink），低くあったり（be low），あるいは上昇したり（rise, lift），高くあったり（be in high spirits）する。このような〈数量の落下〉の例を fall Ⓑと呼ぶ。

次に，〈分類〉を表す fall を見よう。例は⑿。

⑿ a． Canada, Russia, Italy and the Latin American countries *fall* into this category.

b． This example really *falls* within the scope of the next chapter.

c． The education system *fell* under the dual control of the church and state.

d． Family owned business assets and agricultural land usually also *fall* outside the scope of the tax.

これらは，ある対象が「ある範囲の中［外］に落ちる」，すなわち「ある範疇に入る［らない］，属する［さない］，分類される［ない］」ことを表す。対応する空間用法である（6g） Michael didn't see where he was walking and *fell into the pool.* が，⑿の類いを動機づける。fall の次には，into, within, under, outside など，範囲［範疇］との関係（中，下，外）を表す前置詞が後続する。移動の結果，ある範囲に収まるわけなので，⑿の類いも「プロセス＋着点」の認識となる。このタイプを fall Ⓒと呼ぶ。

fall ①「落ちる」が動機づける最後の意義は，〈中立状態への変化〉である。物体がある場所に落ちるように，「ある状態に落ちる」ことを表す。これを fall Ⓓと呼ぶ。空間移動の「着点」に対応する「（状態変化の）結果」が fall に後続する形容詞や前置詞句で言語化されるため，

この類いも「プロセス＋着点」の認識といえる。例は次の通り。

⑿ a．The bill *falls due* next month.
b．The book *fell open* at the page on Venice.
c．As soon as a room *falls vacant*, I'll let you know.
d．She immediately *fell into conversation* with Jack.
e．Then she *fell to* thinking about her aunt.

請求書が「満期になる」，本・部屋が「開［空］いた状態になる」（開［空］く），人が「会話をする状態になる」（会話を始める），人が「考える状態になる」（考え始める）のように，移動動詞 fall は，メタファー拡張により「～になる」にあたる状態変化を表す。

注意すべきは，後で見る「異常状態への変化」との区別である。fall ①〈落下〉は，3.2節で論じたように，それ自体正負の価値に拘束される現象とは言えない。ある対象が「落ちる」ことは，状況・文脈により，いい場合にも悪い場合にもそのどちらとも言えない場合にもなる。よって，fall ①〈落下〉から拡張する fall Ⓓも正負の価値に拘束されることはない〈中立状態への変化〉を表す。先に「ある状態に落ちる」と表現した。これに対し，後で見る fall Ⓕ〈異常状態への変化〉は，負の価値を帯びる。まさに「ある状態に陥る」のである。(12)

ここまで fall ①〈落下〉から拡張する意義を４つ順に見てきた。次に，fall ②〈転倒〉からメタファーにより意義展開する２つの意義を見よう。fall ②〈転倒〉は，その性質上典型的に「突然」「誤って」「故意でなく」といった意味要素が伴う。fall ①〈落下〉が価値に拘束されずに垂直落下現象を表すのに対し，このような「突然」「誤って」「故意でなく」といった意味要素が伴う fall ②「倒れる，倒壊する」には，「負の価値」が伴う。となると，ここから拡張する意義も「負の価値」を帯びるといえる。まず，〈抽象的転倒〉から見よう。例は⒁。

⒁ a．The Labour government *fell* in October 1951 and the Conservatives took up office.
b．The Czechoslovak communist regime *fell* during the "Velvet Revolution" in late 1989.
c．Of 1429 names on its rolls, nearly 300 *fell* in battle or died of wounds, about 180 died of disease, and 249 were discharged or transferred.
d．Several more deer *fell* to that rifle.
e．He ran until his heart stopped and he *fell* dead.
f．Their mountain strongholds *fell* to enemy attack.

人・建物が倒れるように（例⑺参照），政府・政権も「倒れる」（失脚する）。(14c) の fall も，単に人が文字通りに「倒れる」ことを意味しない。or の後に die があることからわかるように，

兵士が戦場で比喩的に「倒れる」(死ぬ) ことを意味する。動物の場合もまた同じ(14d)。とくに「死」を明示したい場合は，(14e) のように形容詞 dead が後続する。[13] (14f) も，単に要塞が文字通り物理的に破壊されて「倒れる，倒壊する」ことを表すのではない。要塞自体は無傷でも，敵の手に渡れば「倒れる」(陥落する) ことになる。このような例を fall Ⓔ〈抽象的転倒〉と呼ぶ。

最後に，〈異常状態への変化〉を表す例を見よう。

⑮ a． She *fell ill* with flu.
b． The joke *fell flat*—no one laughed.
c． Then I *fell unconscious* for a long time.
d． She *fell in love* with him.
e． The station gradually *fell into* disrepair.

先に見た fall Ⓓは正負の価値に拘束されることのない〈中立状態への変化〉を表した。これに対し，⑮は，人が「病気に陥る」，ジョークが「間の抜けた状態に陥る」(すべる)，人が「意識の無い状態に陥る」(気絶する)，人が「恋に落ちる」，駅が「荒廃した状態に陥る」(荒廃する) など，「異常状態に陥る」ことを表す。このような負の価値を帯びる状態変化を fall Ⓕ〈異常状態への変化〉と呼ぶ。

4　結　論

本稿では，移動動詞 fall に関する多義構造を考察した。最後に結論として， fall の意味ネットワークを図示しておく。

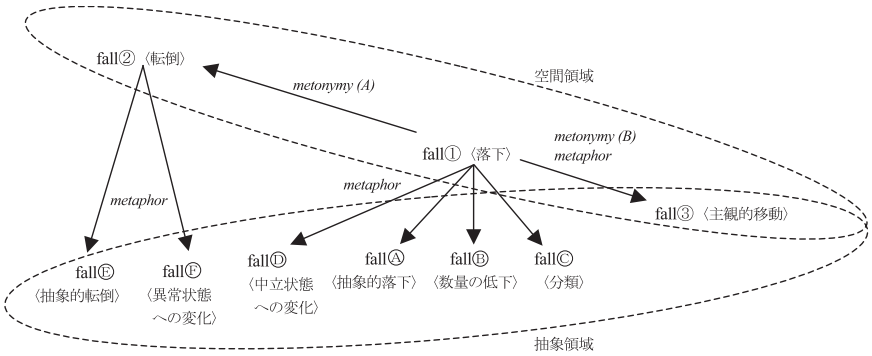


図４　fallの意味ネットワーク

fall①〈落下〉が中心義であり，fall②〈転倒〉やfall③〈主観的移動〉とともに，空間領域を構成する。この空間用法を基盤として動機づけられるのが，抽象領域の拡張用法 (fallⒶ-Ⓕ) である。

注

（1）　辞書名には略語を用いる。正式名称との対応については，末尾の「辞書」を参照。

（2）　内外を問わず最近の学習英語辞典における多義語の記述の動向に関しては，山口（2001）が詳しい。

（3）　『グローバル』の意義記述に関する議論については，山口（2001）の5.2節「構造化の試み：『新グローバル英和辞典』」（pp. 83-88）を参照。

（4）　『グローバル』は，記号＞に関して説明していない。この記号は，左に提示した類［縁］語による説明（落ちかかる）から右の語義（当たる）が生じることを示すと考えられる。

（5）　NODEの意義記述に関する議論については，山口（2001）の3.2節「NODEの試み」（pp. 70-73）を参照。

（6）　「存在のメタファー」（ontological metaphor）については，Lakoff and Johnson（1980：25-32），瀬戸（1995a：110-129），瀬戸（2003）を参照。

（7）　メタファー・メトニミー・シネクドキの下位分類については，瀬戸（1995a，1997c，2001c）を参照。

（8）　例文は，とくにことわりのない場合は，BNCもしくはGoogleからのものである。

（9）　この「垂直性」は，fallの典型事例に伴う重要な意味要素であるが，「垂直性」が希薄になった周辺事例も存在する。

（i）ａ．The first punch *fell* on his nose.（LDOCE）

ｂ．His header *fell* wide of the goal.

（10）　（7b）は，文脈により垂直に「崩落する」（collapse）場合もある。これは，「倒壊する」と運動の仕方が厳密には異なる。しかし，認知的に最も際立つ最上部（図２の点線丸印）が垂直落下している点（図２の点線矢印）は，「崩落する」も「倒壊する」と同じであり，両者の場合をともに図２のように表す。

（11）　メトニミーとactive zoneの関係については，瀬戸（1997b），Seto（2003）を参照。

（12）　「～になる」に相当する状態変化を表す「fall＋形容詞」句については，山添（2003，2004）を参照。

（13）　「移動動詞＋形容詞」がもつ意味制約については、山添（2004）の第２章２．３節「resultative, depictive, Unigue Path Constraint」（pp. 69-71）を参照。

引用文献

Brugman, Claudia（1981）*The Story of Over: Polysemy, Semantics and the Structure of the Lexicon.* New York: Garland.

Dirven, René and Marjolijn Verspoor（1998）*Cognitive Exploration of Language and Linguistics.* Amsterdam: John Benjamins.

Fillmore and Atkins（2000）"Describing polysemy: the case of 'crawl'," in Ravin, Y. and C. Leacock（eds.）*Polysemy,* 91-110. New York: Oxford University Press.

岩田彩志（1998）「A Lexical Network Approach and Its Implications」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書平成９年度Ⅳ』35-45.

Iwata, Seizi（1998）*A Lexical Network Approach to Verbal Semantics.* Tokyo: Kaitakusha.

Kövecses, Zoltán（2002）*Metaphor: A Practical Introduction.* New York : Oxford University Press.

Lakoff, George（1987）*Woman, Fire, and Dangerous Things : What Categories Reveal about the Mind. Chicago:* The University of Chicago Press.

Lakoff, George and Mark Johnson（1980）*Metaphors We Live By.* Chicago : The University of Chicago Press.

Lindner, Sue（1981）*A Lexico-Semantic Analysis of Verb-Particle Constructions with Up and Out.* Ph. D. dissertation, University of California, San Diego.

Lindner, Sue（1982）"What goes up doesn't necessarily come down: The ins and outs of opposites." *CLS* 18, 305-323.

籾山洋介（1997）「慣用句の体系的分類－隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に」『名古屋大学国語国文学』80：29-43.

籾山洋介（1998）「換喩（メトニミー）と提喩（シネクドキー）：諸説の整理・検討」『名古屋大学日本語・日本文化論集』６：59-81.

籾山洋介・深田智（2003）「第３章　意味の拡張」「第４章　多義性」松本曜（編）『認知意味論』東京：大修館書店，73-186.

Rudzka-Ostyn（1989）"Prototypes, schemas, and cross-category correspondences: the case of *ask,*" *Linguistics* 27, 613-661.

Rudzka-Ostyn（1995）“Metaphor, schema, invariance: the case of verbs of answering,” in Goossens, Louis et al.（eds.）*By Word of Mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective.* Amsterdam: John Benjamins, 205-243.
佐藤信夫（1978，1992）『レトリック感覚』東京：講談社.
瀬戸賢一（1986）『レトリックの宇宙』東京：海鳴社.（改定増補のうえ瀬戸1997a に所収）
瀬戸賢一（1995a）『空間のレトリック』東京：海鳴社.
瀬戸賢一（1995b）『メタファー思考』東京：講談社.
瀬戸賢一（1997a）『認識のレトリック』東京：海鳴社.
瀬戸賢一（1997b）「拡大するメトニミー－認知言語学の問題点」 *KLS* 17，67-77.
瀬戸賢一（1997c）「意味のレトリック」中右実（編）『文化と発想とレトリック』東京：研究社出版，94-177.
瀬戸賢一（2001a）「意味拡張におけるメトニミーの位置づけ」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書平成12年度Ⅳ』645-662.
瀬戸賢一（2001b）「理想の英語辞書(2)：意義関係を記述する」『英語青年』 5 月号， 9 -11.
瀬戸賢一（2001c）「語彙的メトニミーのパタン」『人文研究』（大阪市立大学大学院文学研究科紀要）第53巻第 5 分冊，105-116.
瀬戸賢一（2003）「メタファー思考の出発点－ form （形）と存在－」 *SOPHIA LINGUISICS* 50，137-152.
瀬戸賢一［編集主幹］（to appear）『英語語彙ネットワーク辞典』東京：小学館.
Seto, Ken-ichi（1999）“Distinguishing metonymy from synecdoche,” in K. Panther and G. Radden（eds.）*Metonymy in Language and Thought.* Amsterdam: John Benjamins, 91-120.
Seto, Ken-ichi（2003）“Metonymic polysemy and its place in meaning extension,” in Nerlich, B and D. Clarke（eds.）*Polysemy: Flexible Patterns of Meaning in Language and Thought.* Amsterdam: John Benjamins, 195-214.
Taylor, John R.（1989，1995[2]，2003[3]）*Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory.* Oxford: Oxford University Press.
Taylor, John R.（2002）*Cognitive Grammar.* Oxford: Oxford University Press.
Tyler, Andrea and Vyvyan Evans（2001）“Reconsidering prepositional polysemy networks: the case of *over.*” *Language* 77, 724-765.
山口治彦（2001）「多義を記述するために－多義構造と辞書記述のテクスト構造－」『神戸外大論叢』第52巻第 2 号，61-91.
山添秀剛（2003）「状態変化動詞としての fall に関する認知言語学的考察」 *JELS* 20，208-217.（改定のうえ山添 2004に所収）
山添秀剛（2004）「移動動詞 come/go の意味ネットワークならびに状態変化用法に関する認知言語学的考察」大阪市立大学大学院文学研究科，博士論文.

辞　書

Cambridge International Dictionary of English. 1st edition. 1995．［CIDE］
Collins Cobuild English Dictionary. 4th edition. 2003．［Cobuild］
Longman Dictionary of Contemporary English. 4th edition. 2003．［LDOCE］
Macmillan English Dictionary. 1st edition. 2002．［Macmillan］
Oxford Advanced Learner's Dictionary. 6th edition. 2000．［OALD］
『新グローバル英和辞典』第 2 版．2001．［グローバル］
The New Oxford Dictionary of English. 2nd edition. 2003．［NODE］
The Oxford English Dictionary. 2nd edition. 1989．［OED］
『ウィズダム英和辞典』初版．2003．［ウィズダム］

コーパス・サーチエンジン

The British National Corpus.（http://thetis.bl.uk/）［BNC］
Google.（http://www.google.co.jp/）

A Cognitive Study on the Semantic Network of a Motion Verb in English : The Case of *Fall*

YAMAZOE Shugo

Abstract
There are a number of approaches to the association of the form of a word with its meaning. One of the approaches is the notion of polysemy, which means the association of a single linguistic form with two or more related senses. Polysemy has received relatively more discussion in the linguistic literature recently (Brugman 1981, Lindner 1981, 1982, Lakoff 1987, Rudzka-Ostyn 1989, 1995, Iwata 1998, Fillmore and Atkins 2000, Tyler and Evans 2001, Taylor 2002, 2003 etc.) . Despite the amount of interest in polysemy, however, no satisfactory solution or methodology has been offered yet. This paper aims to suggest a synchronic semantic network of the English motion verb *fall* in the framework of cognitive linguistics. Methodologically, the trichotomy of metaphor, metonymy, and synecdoche which Seto (1986, 1995b, 1997a, b, c, 1999, 2003) defines is applied in order to describe the lexical polysemy of *fall* in a principled and systematic way.

Keywords: polysemy, semantic network, meaning extension, metaphor, metonymy, synecdoche

（やまぞえ　しゅうごう　本学人文学部専任講師　英語学専攻）